

「エリスの精神病は演技である」

① 私がこのテーマを選んだ動機というのは、エリスがかかったとされるパラノイア自身に明確な定義がないということと、エリスは舞姫ということもあり、演技することに関してはプロであるので、エリスが演技をしているのではないかと疑問に思ったからである。

このレポートを進めるにあたって、まず最初に演技することによるメリットを説明し、エリスの説明に続いてパラノイアの説明をすることで結論につなげていきたいと考える。

そして、このレポートで言いたいことは、エリスは最後の最後まで豊太郎のことを思っていたということである。

② エリスは精神病にかかったという演技をすることにより、豊太郎の意思を確認しようとしたのだと考える。舞姫を読む限り、エリス自身は子供の準備までして豊太郎に対してドイツに残ってほしいとはっきりといているが、豊太郎は自分の気持ちををはっきりと伝えていない。そのため、相沢が訪ねて来てすべてのいきさつを聞いたときのエリスのショックというのは相当のものだったと思う。しかし、私はここでエリスがパラノイアという精神病にかかったとは考えない。

理由の一つは、豊太郎の意識がはっきりしてきたのは数週間後であり、演技しようとするのに時間があつたと思われ、その間に相沢や母親に話を持ちかけることが出来たと思われるからだ。

たしかに、相沢や母親が快くその話を受け入れたとは考えられない。相沢の場合は、豊太郎とエリスが一緒にいることに対してふさわしいと思ってないので豊太郎が狂ったエリスとこの地に残ると言わないだろうと考え、話を合わせると予想できるが、母親の場合は、前に日本に行くことに対して争った時、エリスの覚悟を知ってあきらめていることからわかるように、エリスが熱心に説得すれば受け入れてくれると思われる。

二つ目の理由はP297の「後に聞けば・・・」からエリスがどのように狂っていったのか、そして、エリスがどれだけ豊太郎のことを思っているのかを読み取ることができるが、これが豊太郎が人から後で聞いたことであり、直接目で見ていないということである。やはり、この時には周りの人が話をあわせていたのではないかとと思われる。

エリスと豊太郎が初めて出会い葬儀のお金のお礼に下宿まで来たことからわかるように、エリスは人から恩を受けるとなんとしてでも返そうとする性格である。そのため、夜遅くぼろぼろになって帰り、倒れてしまった豊太郎の理由を知ったエリスは、舞姫だったこともあり、演技することに関してはプロであるので、恩返しのつもりもあつて演技したのではないかと思う。その恩というのは、お金というものではなく、「まことの我」と「我ならぬ我」戦いながらエリスのことを思ってくれた豊太郎に対する恩である。

パラノイアという精神病は、小説の当時はより広い範囲の症状について指すために、明確な定義が無く、医者でも簡単にだますことが出来たと考えられる。

だから私はエリスの精神病は演技であると考ええる。

③このことからエリスは、自分の意思を示さない豊太郎に対し、意思の確認の為、また、豊太郎に対しても確信させるため相沢や母親と協力し演技をしたと考える。しかし、結果的には豊太郎の意思を確認できたエリスだが、豊太郎と残りたかったエリスにとってこの結果というものは良かったものなのか疑問が残る。

参考資料 教科書